

ヨーロッパみてある記

- 西洋きのご事情 -
(その3)

瀧澤 南海雄

ストックホルムへ

11月20日(火)

5時起床。6時30分にフロントからTelがあり、タクシーが来たと言う。40分以下へ降りてチェックアウト。宿泊料は電話代と共に1人1230クローネ。タクシーは待ち時間の料金(お迎え料金も含むのか)で既に89クローネを表示。いざ走り出すと、メータの上がりやけに忙しい。スウェーデンのタクシーは1クローネずつメーターが上がるのだ。空港に看いた時、メーターは128クローネを示していた。チップと共に140クローネを払う。

空港カウンターの受付嬢は、飛行機は定刻に離陸すると言ったが、定刻を30分過ぎても乗るべき飛行機が飛んでこない。時々案内の放送があるが、スウェーデン語なので何を言っているのか皆目分らない。日本人は我々2人のみ。暇潰しに売店のウィンドウを覗くと、アルミ合金製のグッズが並んでいた。

8時15分にウメオを離陸。朝食は有料(約600円)。中身は、チーズを狭んだ丸パン、チョコレート菓子、コーヒー。これなら宿で朝食を取るべきだった。実は、機内食が無料だと思ひ込み、ホテルの朝食を食べずに出てきたのだ。

飛行機はアーランダー空港に着陸、空港からストックホルムまでは2連式のバス(ワンマンカーで乗車賃は約1000円)に乗った。バスは相当のスピードでふっ飛ばした。ストックホルム市街の入り口には大きな墓地があり、日本のように背の高い墓石がたくさん並んでいた。また、工事現場や町並みを見ると、岩盤がむき出しになっている。

ストックホルムは巨大な岩盤の上に築かれているのだ。

中央駅のロッカーに荷物を入れ、キオスクで葉書を買ひ、駅の構内にしつらえられた喫茶コーナーで、コーヒーを飲みながら葉書を数通書く。コーナーには木が植えられていたが、驚いたことに木から木へメジロが飛び回っていた。

ストックホルムを歩く

町へ出て歩行者天国を歩くが、日本人は他に見掛けず、我々が外人である事が一目瞭然。昼食はトルコ料理店でシシカパブを注文、飯の代わりにフライドポテトがたっぷりついていた。コーヒーと共に1500円。肉はラムで美味であったが、量が多くて食べ残した。

科の同僚への土産はキノコの切手と決めていたので、まず郵便局へ行った。キノコの切手があるかと聞いたら「無い。郵便博物館に行けばあるかもしれない。」との返事。改めて駅に戻り、インフォメーションで道順を聞いて歩き出す。先程歩いた歩行者天国とは反対の方向(オールドタウンと呼ばれている)に曲がると、いかめしい建物が立ち並んでいる。国王の宮殿、国会議事堂などのようだ。途中クリスタルガラスの製品を並べた店があったので入ると、インド人らしい主人が奥から出てきて、「税金ナシ、35%引き、安イヨ」と日本語で呼び掛けて来た。品定めを終えて出ようとしたら、「サヨナラ。マタ明日」と来る。実に日本人慣れしているのだ。次に馬具屋を見付けて入る。小さな馬の置物が可愛い。



写真1 ストックホルム駅の喫茶コーナー

郵便博物館は、人通りの少ない場所にあった。しかし、私の趣味である馬の切手を買うことはできたものの、残念なことにキノコの切手は在庫がなく、買うことが出来なかった。ところが犬も歩けば棒に当たる。駅へ戻る途中の道で偶然切手商を見つけたのだ。そこには各国のキノコ切手がセットになったものがあったので、7組購入、皆への土産がやっと手に入った。

ウプサラへ

15時05分発の電車で次の訪問地、ウプサラへ。ユーレイルパスの使い始めだが、窓口の女の子がパスの手続き方法に不慣れで、戸惑っていた。列車のコンパートメントは6人用だが、我々の入ったコンパートメントには他の客がおらず、2人だけの借り切りで至極快適。そして不思議なことに、ヨーロッパの列車はレールの継ぎ目の音も、車体の揺れもほとんど感じさせないのだ。

15時50分ウプサラ着。ホテルまでは結構距離があり、ぶら下げて歩いたバッグが重かった。ホテルでは私と山川さんが別々のツインルームに案内された。2部屋ともダブルベットが並んでいて、部屋の面積も凄く広い。「これは高い宿泊料を巻き上げられるぞ」と思い、フロントに行ってシングルへの変更を申し入れた。するとベッピン（イングリット バーグマンの顎を細くした感じで、非常に艶っぽかった）のフロント嬢が「お代は1人分ずつしか頂きませんから大丈夫です」と言う。サービス精神は理解したものの、一人分そのものが高いのでは、とまだ不安は残った。

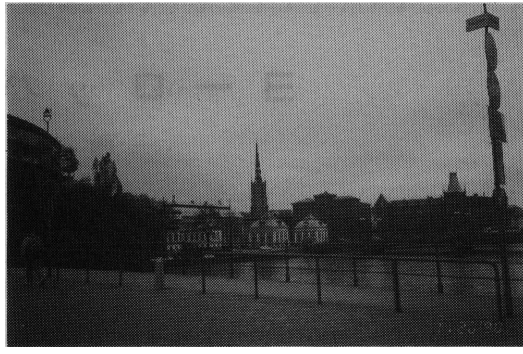


写真2 ストックホルムのオールドタウンを流れる川



写真3 ウプサラへの列車内部

今日は昼から鼻水が止まらなくなった。山川氏の風邪を貰ったらしい（彼は日本を出るときから鼻水が止まらないでいる）。用意の抗生物質を飲むことにする。電話でお湯を注文したら、小さなポットに入れて、かなり年配のウェーターが届けてくれた。日本を離れて初めて飲む白湯は、何となく頼りなげだが、うまくもあった。

19時から晩飯を食べに街へ出る。しかし、商売の種類を問わず、ほとんど開いている店が見付からない。どうも日本人からみると健全すぎる街だ。結局ぐるっと街中を歩いたあげくにホテルの隣のレストランに入る。クロークの男が何処から来たか、と問うので、日本からだ、と答えると、「コンニチワ。日本ノ言葉大好き。コンバンワ。サヨナラ」などと機関銃の様に喋る。ここも日本人馴れしているようだ。

魚の定食コースを選ぶ。

薄焼きパンにホワイトソース、キャビア（まがい物）添えが前菜。メインは「鱈」との説明だったが、出てきたのは「鮭の焼き物」で、甘ったる

いソースが掛かって、マッシュポテトがケーキの飾りクリームのように回りをぐるっと取り囲んでいる。仕方なく甘いソースを取り除いて鮭を食う。マッシュポテトもかなり甘くてもて余した。

ビール2杯をのんで、6000円也。早々に部屋へ帰って風呂と洗濯。 20時30分就寝。

11月21日(水)

今日は午後からスウェーデン国立農業科学大学林産研究所のダニエル博士と面談することになっており、午前中のスケジュールは空き。街の中を例によってテクテクと歩き回ることにする。遠くに高い塔が見えたので近付くと、大聖堂だった。ヨーロッパで出会う初めての教会である。大きな厚い木のドアを開けて中に入ると、途端に体全体がゆったりしたパイプオルガンの音に包み込まれた。これだけでももう天国的な気分になる。そして伽藍の大きさに圧倒される。高さは30mを優に超え、幅40m、奥行き100m近くもあろうかと思われる大伽藍である。入り口に置いてあったパンフレットを読むと、この教会は Upsala を治める王家によって建てられたが、材料に使う石を切り出すために、フランスから呼ばれた石工は、5代に亘って石を切り続けた、と書いてあった。政治と宗教が絡むと人間はとんでもないエネルギーを注ぎ込むもんだ、とすることがひしひしと実感される。

ところで、教会の中にはほとんど人がおらず、オルガンは神への祈りとして、神父の一人が弾いているものようであった。

教会からの戻り道、八百屋があったので林檎、バナナ、柿を買う。林檎はおおむね貧弱、柿も小さかった。

昼食は駅前の中華料理店へ入る。どうも旅行に出て以来、野菜不足で便通が悪いので、せめて米を野菜替わりにしよう、という目的である。店は込んでいた。牛肉の焼き飯にスープを選ぶ。暫くして出てきた焼き飯をみて驚いた。日本での3人前は優にある量が、皿に山盛りになっている。メニューにはストロング(辛い)と書いてあった



写真4 教会の内部

が、辛さはさほど無く、量がもの凄いのだ。回りを見渡すと、どのテーブルも飯は山盛りになっている。質より量か?これが大入り満員の人気の秘密のようだった。

スウェーデン国立農業科学大学林産研究所

食後、タクシーをっかまえて大学に向かう。大学は広大な敷地に分散した数多くの研究所で構成されているため、林産部門の建物を見付けるのに苦労した。案内の看板はあるのだが、一つの看板に50以上の研究所の名前が書き連ねてあるので、なかなか目的の名前を見付けられないのだ。タクシーの運転手は苦労の末に探し出してくれた。

研究所の入り口で案内を請うと、ダニエル博士は直ぐに現われた。会議室へ案内され、同僚のブジャーマン博士を紹介される。

ダニエル博士は電子顕微鏡を武器として木材のリグニン構造や、微生物による腐朽過程を研究している。主な手法は、一般に売られている園芸用土を用いて腐朽試験を行い、これを試料として構造的に観察することである。園芸用土は窒素分を多く含むので腐朽試験がうまく進むそうである。

この試験場では麦稈を用いた試験は行っておらず、食用菌の栽培研究も行っていない。しかし、シタケその他の菌類による木材のリグニンの生分解に関する研究は行っており文献を受領した。

また、当方の用意したシイタケ菌床栽培と稲わら飼料化試験のデータを基にディスカッションした。

終りに施設全体を案内して頂き、今後の交流を約束して4時30分に辞去し、再び列車でストックホルムへ移動した。

再びストックホルムで

ストックホルム駅から宿までは、歩いて行く筈だったのだが、中央駅のインフォメーションの説明が悪かったので、かなり歩き回った末にタクシーに乗る羽目になった。着いてみたら中央駅から地下鉄で二つ目の駅であることが分かった。

夕食のために地下鉄で街へ出る。デパートでクリスタル硝子製の置物を土産に3個買い、歩行者天国の外れ近くのレストランに入る。メニューが読めないの、女主人のお勧めを尋ねると、コショー風味のステーキが良いと言う。出てきたものは付け合わせの野菜が多く、フレンチフライポテトも山のように盛ってあった。ステーキは、コショーがきつめ（女主人は、ストロングと言っていた）だったが、肉の質はスウェーデンで食べた中で最高のものだった。ビール2杯（11）ともに183クローネ。安い。

ところが、料金の支払いで問題が起きた。スウェーデン通貨が足りなかったの、トラベラーズチェックで良いか、と問うと、駄目だと言う。ドルではどうだ、と問うと、これも駄目だと言う。

しからは何なら良いか、と問うと、カードなら歓迎すると言う。世界はカード社会なのを痛感。



写真5 資料館で。左からブジャーマン博士、ダニエル博士

結局、山川さんのピザカードのお世話になって、一件落着。

宿に帰って、フロントで「空港まで行くにはどんな方法が良いか」と問うと、「タクシーが最も便利だが、最も高い。セントラルバスセンターまでタクシーで行き、そこからバスに乗るのが最も経済的です」と言う。そこで明朝6時のタクシーを予約した。入浴、洗濯はいつものごとし。

ドイツへ

11月22日（木）

午前6時にタクシーを呼んでもらったが、何と3台のタクシーが来て玄関前でもみ合いになる。2台のタクシーは他社の無線を聞いていて、客（我々）をかつさらおうとしたらしい。なかなか世知辛い街だ。イラン人の運転手に「セントラルバスセンターに行け」と命じると、「空港までならこのままタクシーで行っても料金は変わらない」と言う。それなら、と予定を変更して空港に直行する。運転手の言ったとおり、バス料金とタクシー料金の合計に近い256クローネでアーランダー空港へ着いた。

塔乗案内があって、一旦、機内に入ったのだが、まもなく機内放送があって、一時ロビーまで戻される。燃料補給の都合らしい。

8時21分離陸。朝食は丸パン1個、ライ麦パン3片、マーマレード、バター、生ハム、チーズ、ソフトソーセージ、珈琲、オレンジジュース、ヨーグルト、ウリ1片、トマト半個、ゆで卵半個、レタス1枚、アップルパイ切れ、フルーツ（ブドウ4粒、イチゴ1粒、パイナップル1片、ミカン1房）。

味は総じて良かった。しかし、スチュワーデスの一人が強い香水を着けているので、彼女がそばを通る度に、生ハムが、ゆで卵が、ブドウが、すべて香水の味と香りになってしまうのには参った。これは明らかな公害、イヤ香害だ。

なお、生ハムにはメロンが付いていて、さすがは経済大国ドイツの飛行機（ルフトハンザ航空）だけのことはある、と最初感心したのだが、食べ

てみたらガリガリの瓜だったのにはガッカリ。

途中下車ならぬ途中着陸

ハンブルグに近付くと、下から時々飛行機が飛び上がって来るのが見えた。スチュワーデスが飲み物の御用聞きに采たのでボルドーワインを注文した途端、他のスチュワーデスに呼び戻されてコックピットに行ってしまった。まもなく機長が放送を通じ、ハンブルグの滑走路の状態が悪く、復旧までに2時間を要するので、デュッセルドルフに着陸する、と伝えた。そのまま、コックピットの扉を開けたままで、スチュワーデスが行き来る。ワインは届かない。おまけにスタッフ全員がコックピットに集まり、何やら相談を始める始末だ。

窓から下を覗くと猛烈な白煙が吹き上げられていた。飛行機の高度まで届くか、と思われる勢いである。良く見ると、原子力発電所から出る水蒸気だった。日本では海水を用いて水蒸気を冷却してしまうから、傍目には原発が稼働しているようには見えない(そのために海水の温度が上昇し、環境へ影響を与えてしまうのだが)。つまりごまかしているのだ。ヨーロッパでは「ここに猛烈なエネルギーを内蔵する原発が、今まさに運転中だゾー」とはっきり住民に見せている。このあたりに、日欧における電力会社や行政の姿勢の違いが良く現われていると思った。

手荷物が消えた

デュッセルドルフに着陸すると、国内線への乗り継ぎ手続きを取らされた。窓口の女性が、荷物は階下の手荷物カウンターで受け取れる、というので行って見たが何も見当たらない。係員に聞くと、ルフトハンザの事務所に行けと言う。そこで、事務所に行くと、荷物は自動的にハンブルグ行き国内線に積み替えられると言う。全く連絡が悪い。

国内線の塔乗待合室には、ケーキ、蜜柑、ヨーグルトがバスケットに山積みされていて、自由にお取り下さい、と書いてある。客は思い思いに好きなものを食べながら塔乗案内を待たされた。伽

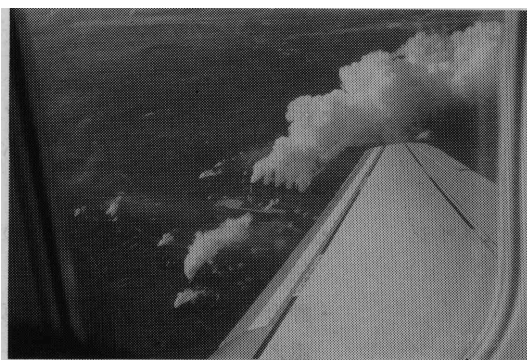


写真6 原子力発電所

排、紅茶も自由に飲める。

12時塔乗開始、12時30分に離陸。機内での飲み物サービスでボルドー産の赤ワインを取る。渋みが強く、やや焦げ臭い。つまりマズかった。

13時05分ハンブルグに着陸。ここでトラブルが発生した。手荷物カウンターで待っていたが、私と山川さんの手荷物だけが出てこない。係員にその旨を告げると、若い兄ちゃんがドイツ語で「ロスト アンド ファンドに行け」と言う。そこで遺失物係の事務所にいって手続きを取る。バッグの特徴、中身を小母さんが聞き取り、コンピューターに打ち込む。発見したらホテルに届けると言うので、やむなくホテルへ。タクシーの窓越しに見える町並みの雰囲気はスウェーデンとは随分違っている。生えている樹木が広葉樹に替わった(スウェーデンは針葉樹)のが原因のようだ。タクシー代48マルク、町から結構離れた所にホテルはあった。

まずいピ-ルにまずい饅

18時30分にルフトハンザの遺失物係に電話する。鞆は見付かったか、と聞くと、開口一番「ネガティブ!」と采た。思わずこっちも「ネガティブ?」と鵞返しに怒鳴ってしまった。「ネガティブ」とはいったい何という言い方だ、と腹が立ったが、一瞬おいて、ここはドイツだったと納得。もう少し待ってくれ、と言うので諦めてホテルのレストランへ降りる。

メニューを見て、次を選んだ。

- 前菜
 - ・生ハムとメロン
 - ・海老のカクテル
- スープ
 - ・田舎風ポテトスープ(ドイツの伝統料理とメニューに書いてある)
- メイン
 - ・鰻のフライ(同じくドイツの伝統料理と書いてある)
 - ・鯡のバター焼き・ホーレン草添え
- サラダ
 - ・ピュッフェ方式で、食べ放題

メインは一皿ずつ取って、山川さんと分け合っ
て2種類とも味わった。鰻はドイツ人が好むこと
を知っていたから、どんな料理かと思ったのだ
が、ただのぶつ切りを下味もつけずに揚げた物だっ
た。要は脂っこいだけの代物。日本のカバ焼きが
いかに優れた料理かを、しみじみと感じさせるに
十分な教材であった。鯡はキンキ風。スープとホ
ーレン草は塩がきつい。

ところで、ビールにもがっかりした。辛口と言
うと聞こえはよいが、コクが無くて舌にピリピリ
と猛々しい飲み口なのだ。「別のビ-ルはある
か?」と問うと、もう2種類ある、と言う。取っ
てみたがどれも同じ印象だ。スウェーデンのスト

ロングビールが余りにもうますぎたのだろうか。
否、後で知ったのだが、本当にうまいビールはホ
テルなどでは飲めないのだ。しかし、この時はそ
んな事情を知らぬまま、腹立ち紛れにビールをあ
おった。料理とビール6杯で130マルク。2人分
としては妥当な値段か。これでビールがうまけれ
ば、少しは満足できたのだが。

部屋へ帰って暫く休憩。21時20分にフロントか
ら電話があり、手荷物が届いた、と言う。やれや
れ。フロントにいくと、届けた人はおらず、バッ
グだけが床に二つ並んでいた。バッグを受取りが
てら、明朝、林業林産試験場に行くためのタクシ
ーを予約する。

いつものことだが、部屋中にロープを張り巡ら
し、洗濯物をぶら下げて1日の仕事の仕上げとす
る。今日は、海外旅行のガイドブックに載ってい
るトラブルと対策、電話の掛け方、などのほとん
どを経験したようなもの。充実した1日と言うべ
きか。ところで、部屋の中に一つだけ開かないド
アがあった。トイレ、ロッカーのドアはもちろん
開く。鍵が掛かっている、この開かずの扉のお陰
で、我々2人は稀有な体験をすることになるのだ。

(つづく)

(林産試験場 微生物利用科)